

フォナー編『フレデリック・ダグラスの生涯と著作集』によせて

—アメリカ黒人問題の視角から—

本 田 創 造

1

黒人問題はアメリカの盲点、アメリカ民主主義の致命部である。全世界にさきがけて民主革命をなしたアメリカ、パトリック・ヘンリーの「自由の演説」(1775年)や、「人権宣言」とならんでいまなお世界が誇る「独立宣言」(1776年)とともに誕生したアメリカ——この民主共和国 200年のめざましい歴史の流れのなかで、黒人問題はいまだに解決されることなく今日までとり残されてきた。

じじつ、植民当時の 1619 年、ジェームス・タウンに新大陸はじめてのアフリカ黒人が、奴隷つまり植民地労働力としてオランダ船によって輸入されてこのかた、その表紙に「きたりて抑壓者のきずなをたちきれ」と記したガリソン William Lloyd Garrison (1805~1879) の『解放者』*Liberator* 発行(1831年)にはじまる奴隷制の全面的廃止をとなえるいわゆるアボリショニスト・ムーブメント Abolitionist Movement, オサワトミーのブラウンの名で知られる熱烈な黒人アボリショニスト、ジョン・ブラウン John Brown (1800~1859) のハーバース・フェリーの襲撃(1859年)、リンカーンのあの有名な「奴隷解放宣言」*Emancipation Proclamation* (1863年)を含むところのそれじたい本質的に奴隷解放戦争であるアメリカの内戦すなわち南北戦争 *The Civil War* (1861~1864)、さらにアメリカ黒人にとっては決して忘れることのできない「内戦の局面ののちの真に革命的な局面」(マルクスよりエンゲルスへの手紙、1866年4月23日)、再建期 *Reconstruction* (1865~1876) における黒人とプーア・ホワイトとの同盟を主力とする民主主義のための闘い等々——そのような数々のランドマークがあったにもかかわらず、アメリカ民主主義はいまだかつて黒人にとって民主主義であったことはない。独立建國いらい今日までのアメリカの歴史は、一面からみれば、その前半を黒人奴隷制度との、その後半を黒人差別制度との闘いに終始してきたといっても過言ではない。

歴史的にこのようであったばかりではなく、黒人問題は、「原爆帝国主義」時代の今日、いっそうその矛盾を激しくさせ、重大さを増すとともに、より決定的にアメ

リカ民主主義との対決をせまられている。げんざい、アメリカの黒人問題は、アメリカ国内だけでの黒人についての単なる人種的偏見や差別待遇の問題ではない。それは、ひろく世界における民族問題——帝国主義下の被壓迫諸民族や植民地・半植民地の従属諸民族と同様に被壓迫諸民族の問題——の重要な一環として提起されている。

フォナーが8年間の年月をかけて、ようやくにして編纂、完成した『フレデリック・ダグラスの生涯と著作集』を前にして、私は、ここで本書の内容を細部にわたって紹介、論評したり、ダグラスの生涯やかれの思想的発展を詳述したりしようとはおもわない。それらについては、別個に独立の論文がかかれてしかるべきであり、ここでは、とくにこの本がげんざい出版されたことの今日的な意義を、主としてアメリカ黒人問題の視角から、私なりに考えてみたい。

2

それにしても、行論のはじめに、この本の内容とダグラスその人の生いたちについて、簡単にふれておこう。

i) この本の内容

前世紀のアメリカが生んだすぐれた黒人指導者のひとり、フレデリック・ダグラスは、1895年2月20日に死んだが、そのとき、かれはその輝かしい生涯の結實ともいふべきいくたの貴重な業績を、この世に残した。当然のことながら、これらの業績は、學者のそれのように体系的にまとまったかたちをとっておらず、しかも、それらの原資料は、その後約半世紀のながきにわたって——この時期にアメリカにおける黒人問題は、再建期の敗北ののち、アメリカ資本主義の帝国主義への轉化とともに、そのもとで新たなる脚光を浴びて展開されなければならなかったにもかかわらず——全國大小の図書館、各種の歴史學協會などに放置された。ようやく、1942年になって、はじめてフォナーがその拾集、出版の準備に本格的に着手した。こうして、かれの8年間にわたる努力の結果できあがったのが、全4巻をなす Philip S. Foner ed., *The Life and Writings of Frederick Douglass*, International Publishers. である¹⁾。第1巻は *Early Years 1817~1849*、第2巻は *The Pre-Civil*

War Decade 1850~1860, 第3巻は *The Civil War* 1861~1865, 第4巻は *Reconstruction and After* となっており²⁾, 各巻のはじめにフォーナーが書いたきわめて要領のよいダグラスの傳記が各時期ごとに収録されている。

全巻にもられたダグラスの著作は、その大部分が一般には未公開のかれの手紙、かれじしんがたずさわってきた『ノース・スター』*The North Star* のちの『フレデリック・ダグラス・ペーパー』*Frederick Douglass' Paper* をはじめとする各種出版物その他に掲載された重要論文、さらに各地の集會でかれがおこなった数多くの演説などで、それらが上記の時期ごとに各巻に分類されている。そのいずれもが、南北戦争を中心とするアメリカ史におけるもっとも重大かつ決定的な時期に、この國の黒人が直面した諸問題に直接に関係しているばかりではなく、この時期のアメリカ社會の本質を正しく理解するための重要な資料を豊富に提供している。

ii) ダグラスの生いたち

.....

このひと このダグラス

このかつては奴隷であったひと

この膝つくまでうちのめされた黒人

たとえ自分は追放されても

だれひとり狩りたてられたり孤獨にされたりはしないところの

世界を夢みつづけたこのひと

このひとは記憶されねばならぬ

おお 鑄造の文字ではなく

傳説やうた物語や青銅の文字ではなく

かれの生命からあふれでてきたおおくの生命で

かけがえない美しさをたえず夢みつづけてきたかれの夢を

眞に肉體のものとするおおくのおおくの生命で。

ロバート・E・ヘイデン Robert E. Hayden (1913~)によってこのようにうたわれた³⁾フレデリック・ダグラス。そのフレデリック・ダグラスの名でやがて世界に

知れわたることになったフレデリック・オウガスタス・ワシントン・ベイリー Frederick Augustus Washington Bailey は、1817年2月のある日、メリーランド東海岸タルボット郡のタッカホーで生れた。かれの母、ハリエット・ベイリーは黒人奴隷、父の名は不詳だが白人、そして1人の兄(Perry といった)と4人の姉妹(そのうちの2人の名は Sarah と Eliza といった)があったらしい。母についてのかれの知識は、きわめて乏しかった。かれの母ハリエットはかれが7歳のとき死んだが、かれの脳裡にかすかに残っていた母の記憶は、母がかれの許から12マイルほど離れたプランテーションで働いていたこと、そして母が死ぬときまで4、5回しか會えなかったことぐらいである。ハリエットは長いはげしい一日の仕事をおえてから、12マイルの道をとぼとぼとやってきて、かれに大きなジンジャー・ケーキをくれた。「わたしは眠りにおちたが、翌朝、目を覺したときには母はもう歸ってしまっていた」とのちになって、かれは、數少なかった母の訪れを回想している。幼少のこの時期を、かれは、祖父母の奴隷小屋ですごした。祖母ベツシー・ベイリーは、やさしく温いところのもち主だった。「Grandmama Betty」, かれはこうよんでいる。同じ7歳のとき、かれはこの祖父母の許から、ワイ河畔のかれの主人アロン・アソニーの家に移され、アソニーが管理を委ねられていたプランター、エドワード・ロイドのプランテーションのひとつで働くことになった。かれが奴隷としての悲しみと屈辱を身をもって知ったのは、このプランテーションにおいてであった。その翌年、1825年の春、かれはアソニーの親戚にあたるボルチモアのヒュー・オウルドの許につれて行かれた。はじめは家の召使いとしてのちには主人の工場の未熟練工として、ここで7年間をすごすことになったが、このボルチモアへの移住については、かれじしんがのちに「その後の生活への門戸を開いてくれた」といっており、またフォーナーは「波亂にとんだかれの生涯での數多い轉換點のその最初のもの」となると述べている。というのは、このボルチモアでの生活が、學ぶことを教え、さらに奴隷こそが學ばなければならないということをかれに決心させたからである。やさしい女主人のソフィア・オウルドは、かれの熱心に動かされて、アルファベットの字ほどきから簡単な読み書きを教えはじめた。が、かれの急速な進歩を知った主人のヒュー・オウルドは「學ぶことは立派な奴隷をだいなしにしてしまう」と妻に命じてこれ以上かれに教えることを拒絶させた。かれが學ばなければならないと決心したのはこの時からである。わずかの貯えのなかからはじめて買った書物 *The Columbian*

1) もっともかれは本書を完成する以前の1945年に同じく International Publishers より *Builders of the American Nation Series* の1冊として、*Frederick Douglass: Selections from His Writings*. を出版している。

2) 第1, 第2巻は、いずれも1950年に、第3巻は、1952年に出版された。第4巻も、すでにアメリカでは出版されているようであるが、すくなくとも、私は、まだこれに接していない。

3) ラングストン・ヒューズ編の黒人詩集『ことごととの聲あげて歌え』(木島始譯)より。

Orator は、多くの疑問をかれに抱かせた。何故にじぶんは奴隷であるのか？ 何故にあるひとびとは奴隷であり、他のひとびとは主人であるのか？ かれは自問した。そして、ひとがアポリシヨニストを非難するのをきくたびに、アポリシヨニストとは、いったい、どんなひとのことであり、どんなことをするひとなのかと眞剣に考えた。

ボルチモアでの生活は、奴隷としては、かなり恵まれたものであった。が、ここでの生活も主人ヒュー・オウルドの死によって、やむなく中斷されなければならなくなった。ヒュー・オウルドの死から 1838 年秋のかれの「自由への道」の首途まで約 5 年間に、かれは残虐な主人トーマス・オウルドのプランテーションで、あるいは人情のひとかけらもない職業的な奴隷仕込人エドワード・コヴェイの許で、また親切な奴隷主ウィリアム・フリードランドのプランテーションで、さらにウィリアム・ガードナーの工場などで働いた。この間かれは、1836 年のはじめ、いちど逃亡を企てたことがあったが、成功しなかった。1838 年の逃亡まえの約 2 年間に、かれは、ボルチモアのガードナーの造船工場で働いた。ここで、かれはコーカーとしての造船技術を身につけ、かなりの賃銀を支拂われた。かれが自由な黒人たちと交り、特別のはからいでかれらの集りのメンバーになることを許されたのはこの頃である。自由な黒人たちとの討論で、かれは早くも卓越した才能を發揮した。その集りで、のちにかれの妻になったアンナ・マレイを知ったが、そのことが圖らずもこれまでかれのこころのなかにわだかまっていた逃亡計畫を促進させることになった。自由がかれに愛する女との結婚を、奴隷としてではなくひとりの人間として約束すると考えられたからである。アンナもまた逃亡をすすめ、彼女の 9 年間のたくわえを、そっくりかれに與えた。かれが長い奴隷生活に訣別し、ボルチモアから北極星を求めて北への逃亡の途についたのは、1838 年 9 月 3 日の月曜日だった。アンナは一足遅れてかれのあとを追ったが、途中ニュー・ヨークで 2 人は正式に結婚し、数日後に無事マサチュセッツのニュー・ベッドフォードにたどりつくことができた。ここで、かれらはジョンソンなる黒人夫妻の温いもてなしをうけたが、このひとのすすめに應じてかれはじぶんの名をフレデリック・ダグラスと改めた。ダグラスの名は、ジョンソンがウォールター・スコットの『湖上の美人』(『湖の麗人』) Sir Walter Scott, Lady of the Lake からとったものだった。はじめ、かれはコーカーとしての職を探したが、白人のコーカーが黒人と一緒に働くことを拒否するという理由で、誰もかれをやとおうとしなかった。黒人に對するこのような偏見が南部だけでないことを知

ったダグラスは、このときから日傭労働者になった。同時に妻のアンナは召使いの仕事をみつけ、かれの収入を補った。1839 年 6 月に最初の子供ロゼッタが生まれ、さらに 1 年 4 ヶ月後にルイスが生まれた。

ボルチモアを去る以前に、かれはアポリシヨニストについての若干の知識をもっていた。が、かれにこの方面への関心を強く刺戟したのは、ニュー・ベッドフォードにきて 4 ヶ月後にガリソンの『解放者』をはじめて手にしたときからである。すぐに、かれは『解放者』の熱心な定期購読者のひとりになった。どれほどの感激をこめて、毎週かれはその記事を貪り讀んだことか。「私の魂はぱっと火のように燃えあがった」とのちになってかれはかいている。黒人を中心とするこの地のアポリシヨニストたちの集會に、ダグラスの姿がみうけられるようになった。1839 年 3 月 29 日付の『解放者』に、はじめにかれの名前が掲載された。それは黒人たちをアフリカに送還しようとするいわゆる「アフリカン・コロニゼーション・ムーブメント」African Colonization Movement に反對するこの地の黒人たちの集會で、かれがおこなった演説についての記事であった。ガリソンの言葉を借りていえば、かれの演説は「われわれの支持と信頼に價するもの」であった。かくして、かれはアポリシヨニストとしての生活の第一歩を開始したが、1841 年 8 月のナンタケットにおけるかれじしんの過去の生活に直接にふれた奴隷制についての演説は、その後のかれの生涯の道を決定することになった。ナンタケット演説の数日前、かれは、はじめ、ガリソンに會っていた。それは、ダグラスにとってこれまでに一度もなかったほどの感激だった。ガリソンによって「その榮譽はパトリック・ヘンリーのそれにも匹敵するもの」と賞讃されたナンタケット演説を契機として、アポリシヨニストとしての生涯をかけたかれの新しい生活が開始された。

その後のかれの生涯についてはここに詳述しないが、かれが Narrative of the Life of Frederick Douglass⁴⁾ と題してみずからの傳記を公けにしたのが 1845 年 5 月、その後 1847 年までイギリスに渡り、この地で「自由」を購入して逃亡奴隷は自由な黒人としてアメリカに歸っ

4) かれの自傳はその後 2 度の改訂をへて、1882 年には The Life and Times of Frederick Douglass という表題のもとに出版された。なお、ダグラスの傳記には、F. M. Holland: Frederick Douglass—the Colored Orator (1891), C. W. Chesnut: Frederick Douglass (1899), Booker T. Washington: Frederick Douglass (1907) などがあるが、W. E. B. Du Bois によれば今度の Foner のそれがもっともスタンダードなものである。

た。1847年から1860年にかけて『ノース・スター』のちの『フレデリック・ダグラス・ペーパー』を発行、各地の奴隷制反対運動に参加するとともに、内戦に際してはいち早く連邦政府に黒人の軍隊編入を強調した。戦後数年間、講演家としての生活を送ったのち、1871年にはグラント大統領によりサント・ドミンゴ委員会の書記官補に任命され、1877年～1886年にはコロンビア区の司法秘書官、證書作成官などとして、さらに1889年～1891年にはハイチ共和国の総領事をつとめるなど國の政治にも直接に関与した。1895年2月20日コロンビア区のアナコスティア・ハイツにて没。

ジャクソニアン・デモクラシーの主要な一局面としての奴隷制反対運動——奴隷解放闘争が本格的に開始された1830年代、はじめガリソニアンとして出発しやがてガリソンから離れていったかれ、ジョン・ブラウンとも交りながら身を挺してブラウンの壯舉にしたがえなかったかれ、そのようなアボリショニストとしてのフレデリック・ダグラスについては 今日、多くの注文がなされるであろう。それにもかかわらず、「このひとは記憶されねばならぬ」とうたったヘイデンの言葉は歴史の眞實をつたえている。

3

かれじしん黒人として生れ、前世紀末から今世紀はじめにかけて、ブーカー・T・ワシントン Booker T. Washington (1856～1915) の運動のあとをうけて展開された「ナイアガラ・ムーヴメント」Niagara Movement のかた、アメリカにおける近代黒人解放運動に挺身してきたデュ・ボイス (デュ・ボアともいう) W. E. B. Du Bois (1868～) は、本書を『サイエンス・アンド・ソサィエティ』誌に紹介するにあたって、つぎのようにかきだしている⁵⁾。「白人世界で有色 (黒人) であることは、単に個人としての侮辱や機會の缺如だけを意味するのではなく、このような不利の条件のもとで黒人がどれほどのことをなしとげようとも、それが未來世界から抹殺されるのがつねであるということの意味している。というのは、黒人の行爲を記録する歴史がないからである。」

「……たいていのアメリカの歴史家はダグラスを無視した。マクマスター、ロード、チャニングはかれについて僅かしか述べておらず、その他の群小歴史家たちはなんらふれるところがない。」同じことは、本書を編纂したフォナーもいっている。そして、かれはさも感慨深げ

に、こうつけたしている。「フレデリック・ダグラスの名は、ジェファソンやリンカーンの名とならびおかれてしかるべきである。ところが、ごく最近になって、かれの名は忘却から救出されたのだ」と。ここにひとつの問題がある。それは、ダグラスが黒人であり、かれが奴隷制度に反対し黒人解放のために闘ったという嚴然たる歴史上の事實と表裏の關係をなしている。

しかし、このことは決してダグラス個人の問題やかれをとりあげなかった個々の歴史家たちの問題ではない。今日までのアメリカの歴史が、すでに世界的に知れわたっていたダグラスをさえそのような地位におしとどめておくことを必要としたからである。今日までのアメリカの民主主義が、黒人を白人と平等の地位におくことを頑強に拒絶しなければならなかったからである。そのようなダグラスの問題は、一言でいえば、いわゆる「もうひとつのアメリカ」——アメリカにおける被抑壓少数民族の、ひいては抑壓された人民大衆——のそれであり、ガブリエルやナト・ターナーの、ハリエット・タブマンやジョン・ブラウンの、また「ギディオソ・ジャクソン」やアルバート・パーソンズの、さらにはスコツポロ事件やピークスキル事件の問題である。

なぜか？

結論的にいえば、それが、歴史的にアメリカ資本主義の要求のひとつであったからである。菊池謙一氏はそのすぐれた業績『アメリカの奴隷制と近代社會の成長』のなかで、アメリカ南部のプランテーションを早期奴隷制プランテーション (植民時代)、盛期奴隷制プランテーション (獨立から南北戦争まで)、クローパー制プランテーション (奴隷制廢止からげんざいまで) の3つに分類して、つぎのように述べている。「早期奴隷制プランテーションには、もっぱら白人奴隷である Indentured servants (年期契約作男) の労働に依存していた前期と、黒人奴隷に依存した後期を區別できるが、それらは、直接それをうみ出したイギリスの本源的蓄積期の産業資本に従属し依存し、その蓄積の有利な道具または足場の一つであったが、盛期奴隷制プランテーションは、産業革命期のイギリス産業資本に安價な工業原料の大量供給者として従属し、イギリス資本の世界市場征服の足臺になり、あわせてアメリカ北部の産業資本の蓄積の足場ともなったのである。クローパー制プランテーションは、とくに帝國主義時代のアメリカ獨占資本の經濟的・政治的・反動の一つの足場になり、一般的危機の時代の金融資本のファシズムの一つの足場になる⁶⁾。——」

このように、アメリカ資本主義は、その歴史的發展の各段階で南部のプランテーションを、ひとつの不可欠な

5) *Science & Society*, Vol. XV, No. 4, 1951. もっともかれが紹介したときには、最初の2巻だけしか出版されていなかった。

条件、足場としてこれを利用しながら成長してきた。このことは、もちろん、前期的・半封建的な性格をもったプランテーション制度が、そのまま資本主義的發展に役立ったということの意味しない。南北戦争それじたいが、このことを雄辯にも語っている。しかし、再建期におけるブルジョアジーの裏切りののち、産業的北部の大資本とプランテーション的南部の寡頭権力との融和のうえに成立した 1876 年の「ヘイズ＝ティルデンの妥協」Hayes-Tilden Compromise 以来、この「紳士協定」のルールによってアメリカ資本主義は早くも帝國主義への道を驀進しはじめた。世界的黒人歌手ポール・ロブソン夫人のエズランダは、パール・バックとの對話のなかで、うがったいいかたをしている⁷⁾。「南北戦争では北部ではなく、南部が勝ったのだ——」と。

げんざい、アメリカは、自国内においてさえ、尨大な一大植民地を擁している。それは、1830 年代の棉花生産高揚期に嚴然と確立されてから今日まで、鞏固に存続しつづけてきた南部一帯にひろがるあの黒人地帯 Black Belt である。ヴァージニア、ノース・カロライナ、サウス・カロライナ、フロリダ、ジョージア、ミシシッピー、ルイジアナ、テキサス、テネシー、アーカンソーの諸州を、全的にあるいは部分的に三日月形にかたちづくるこの黒人地帯には、全國黒人人口の約 3 分の 1 およそ 500 萬人の黒人が、黒人地帯全人口の約 48 % を占めて住んでおり、いわゆる南部棉花王國の心臓部をなすとともに、いまもってプランテーション經濟が支配的に根をおろしている。そのプランテーション制度こそ奴隷制の遺制であり、安價で屈從的な從屬労働をつねに必要とすることにおいて、もっとも恥しらずな労働力の搾取制度であるとともに、げんざいのアメリカ獨占資本のもっとも無慈悲な抑壓の道具である。ハリ・ヘイウッド Harry Haywood (1898～) が『黒人の解放』のなかで述べているやうに⁸⁾、「木蓮花の甘い芳香や楽しく陽氣そうな黒人バンジョー弾きの美しの國南部は、決して本當の南部の悪臭をかくすことはできない。」この國に居住するあらゆるひとびとのなかで、南部のひとびとは衣食住のすべてにおいて、もっとも貧しくもっともみすぼらしく、そして賃銀は最低である。アメリカ黒人問題の中心が南部とくに黒人地帯にあるということの認識は、こ

の問題の本質その解決を考えるにあたって決定的に重要であるが、このことは黒人問題が南部にだけ限られるということの意味しない。北部のなかにも「南部」はあるし、「黒人地帯」は存在している。

そこから得られる尨大な額の超過利潤が、今日のアメリカ獨占資本存立のための重要な支柱のひとつになっている。「合衆國帝國主義は今日では資本主義世界のあらゆる部分から利潤をひきだしている。しかしウォール・ストリートの超過利潤の本來の基盤、しかもいまだにどのひとつの外國よりも大きな源泉は、合衆國內部における黒人人民にたいする抑壓である。——」とヴィクター・パーロー Victor Perlo は述べている⁹⁾。そういう意味で、この超過利潤——年間約 40 億ドルといわれる——は、げんざい世界の後進國、植民地・半植民地の從屬諸國から得られるそれと、本質的には同じ性質のものである。こうして、このような黒人地帯は「白人優越主義」の牙城であり、その存在じたいが、全南部の労働水準や文化水準をつねにひきさげておく制動機の役割を果しており、同時に北部における組織労働者の利益をもおびやかしているばかりではなく、その過剰人口は労働豫備軍の基地となっている。このように、アメリカにおける黒人問題は、單にアメリカ國內の黒人の問題だけではなく、労働者や農民をはじめとする被抑壓階級がいかんしてみずからを解放するかという問題につらなっており、植民地・半植民地における被抑壓諸民族がいかんして獨立をかちとるかという問題につらなっている。

黒人にたいするあらゆる人種的偏見、差別待遇は、そのような土臺のうえにうちたてられた高層建築である。

4

アメリカにおける黒人にたいする人種的偏見や差別待遇の實情については、われわれの身のまわりにも、いくつかの資料がある。いま、おもいつくままにあげてみると、やや古いところでは、シエグフリードの『現代のアメリカ』André Siegfried, Les États-Unis d'aujourd'hui, 1936. があるが、昨年、世界勞連出版部からメアリー・イーツの署名いりて各國語版で出版された『有色人種の差別待遇』は、主として黒人を中心にひとりアメリカのみならず世界におけるあらゆる差別待遇の形態や人種的迫害の現實をつたえている¹⁰⁾。その 1 年前の 1951 年 8

6) 菊池謙一『アメリカの奴隷制度と近代社會の成長』64 頁。(『社會構成史大系』第 7 卷所收)

7) パール・バック『黙ってはいられない』(鶴見和子譯) 192 頁。

8) Harry Haywood: Negro Liberation, 1948. p. 21

9) ヴィクター・パーロー『アメリカ帝國主義』(堀江忠男譯) 127 頁。

10) Mary Yeats: Color Discrimination, 1952. この本は『白人は有色人種を迫害する』というかなり刺戟的な表題で邦譯されている。

月には、アメリカにおける政府の人種的抑圧政策の實情をひろく世界に向って訴えた『われわれは根だやし——黒人にたいする政府の犯罪——を告發する』が、市民権擁護委員会のウィリアム・バタソンはじめ 40 餘名の名で國連に提出された¹¹⁾。さらに、げんざいのアメリカにおけるそれらの事情については、『タイム』その他の記事に依據しつつ、菊池謙一氏がきわめて具體的かつ詳細に諸雑誌に紹介し、あわせてその本質の究明につとめておられるので¹²⁾、わたくしは、限られた紙面の関係もあり、ここでは、とりあげない。なお参考までに、アメリカにおける黒人の問題をテーマとした文學作品で邦譯されたものをあげれば、前世紀中葉にかかれたストウ夫人の古典的作品『アンクル・トムス・ケビン』はともかくとしても、ラングストン・ヒューズの『笑わぬでもなし』Not Without Laughter, シンクレア・ルイスの『血の宣言』Kingsblood Royal, アン・ペトリーの『街路』The Street, リチャード・ライトの『黒人の息子』The Native Son などがあり、そこには黒人にたいする白人の偏見のもとで呻吟する黒人の姿が如實にうかがわれる。

「白人優越主義」white superiority, 「黒人差別法」Jim-Crow Law, 「人頭税 (投票税)」poll-tax, 「特別区」ghetto, 「白百合 (黒人排斥)」lily-white, 「黒人専用車」Jim-Crow car, 「キュー・クラックス・クラン」Ku Klux Klan——などの言葉は、黒人差別待遇や人種的偏見の集中的な表現でありその象徴である。さらに、シンクレア・ルイスの上記作品のなかでは、「黒人」を表現するにあたって十指に餘る用法——たとえば、ふつう用いられる colored (colored man, colored people), black (black man, black people), negro などのほかに nigger, nig, dinge, darky, boogy, smoke, coon, jig, spade,…… Afro-American など——がなされているが、ここにも黒人にたいする白人の侮蔑的態度を十分に看取することができる。そして、その「黒人」とは、この作品の主人公——はじめじぶんたちの祖先に王の血統を

求めながら、ついに王の血ではなく黒人の血を發見したニール——の場合に端的にみられるように、たとえ 32 分の 1, 64 分の 1 の血であろうとも、それが黒人の血の一滴でありさえすれば、それで十分である。「生物學的」というよりは「社會的」な範疇である。「白人優越主義」者たちの「生物學的」ないしは「人種學的」理論が、それじたいなんら科學的な根據をもつものでないことは、いまでは證明ずみのことがらであって、たとえば『菊と刀——日本文化の型』などでわが國にも名の知られているルース・ベネディクト女史は、『民族——その科學と政治性』Ruth Benedict: Race—Science and Politics. のなかで、かつてのナチス・ドイツの優秀人種の理論を反駁して、いわゆる純粹人種 pure race にもとづくところの人種主義 racism を否定している。

それはともかく、すでにふれたように、今日のアメリカ黒人問題が、帝國主義下の被抑壓民族の問題——民族としてのみずからをいかにして解放するかという問題——の一環であってみれば、その解決はげんざいのアメリカ獨占資本との決定的な對決なしにはありえない。しかも、「最大限の資本主義的利潤を獲保する」というあの現代資本主義の基本的經濟法則が、もっとも典型的に作用しているのはアメリカにおいてである。戦後、世界における被抑壓民族の解放運動が飛躍的に發展してきたことは周知の事實である。そのような世界的規模での民族解放運動のもとで、アメリカ黒人の民族的自覺がいちだんと高揚してきたことは當然である。このことがアメリカ獨占資本の國內における超過利潤の源泉を動搖させるとともに、ひいてはアメリカの世界政策にも重大な打撃を與えることはいうまでもない。したがって、アメリカ獨占資本の黒人にたいする政治的・經濟的な抑壓政策はますますこつに強化擴大されざるをえない。

そのような情勢のなかで、今日、理論戦線における黒人問題の本質的な究明は、この問題を現實に解決してゆくための不可欠な条件であり、必須の急務である。私がここにとりあげた書物は、それが直接に今日のアメリカ黒人問題をとりあつまっているというわけではないが、フレデリック・ダグラスというひとりの人間をとおして、この問題の歴史的な性格、その本質的な究明に貢獻するところ大なるものがある。

そのような觀點から本書の出版を考えると、本書がダグラスそのひとやかれの時代を理解するうえでの貴重な資料を豊富に提供しているばかりではなく、本書の出版じたいが、深まりつつあるアメリカ社會のその内的矛盾のあらわれであるといえ、私のいいすぎかどうか。

(1953.6.30)

11) We Charge Genocide—The Crime of the U. S. Government against the Negro People. 私はまだそれを直接みる機会をもたないがその内容の一部はわが國にも若干紹介されている。Labor Research Association の Labor Fact Book, Vol. 11 によれば、このパンフレットは、1946 年 6 月～1951 年 6 月の 6 年間に少くとも黒人 79 名が官憲に黒人 42 名が個々の白人によって殺されたことを示している。ついでながら Labor Fact Book は、この數字がじっさいにはもっと大であることを注意している。

12) たとえば『改造』(1952 年 5 月號), 『潮』(1952 年 8 月號), 『部落』(33 號), 『歴史評論』(1952 年 11 月號) などに掲載された同氏の諸論文を参照されたい。